校長室から令和２年１２月７日

「埴生の宿」は理想論か

先日、３年生の道徳の授業を参観しました。題材は「埴生（はにゅう）の宿」。主題は「周りの人に支えられて」というものでした。中学校の先生が１７年前に担任したクラス内での出来事を振り返ります。生徒たちが協力して一人の生徒を支え、支えられた生徒も、その後の人生をしっかりと生きているというものです。

中学３年生のあるクラス。小学校時代につらい思いをした女子生徒がいました。クラスのみんなもその事を知っていましたが、いたわることはできても助けることはできずにいました。そんな彼女に、担任の先生は放課後、「埴生の宿」を歌って聞かせます。最初は反応がなかった女子生徒も少しずつ、その歌詞を目で追うようになります。教室で毎日歌っている先生を見て、生徒たちも数人ずつ、入れ替わり立ち替わり先生と一緒に歌うようになりました。

校内合唱コンクールの曲を決めるとき、生徒たちは「埴生の宿にしよう」と発案します。しかし、この曲は二部合唱で、三部合唱で選曲する他のクラスにはコンクールで負けてしまいます。それでもこの曲を歌うことを決め、練習が始まり、歌っているうちに女子生徒も小さい声で歌い出します。

本番、順番がきて、歌い始めたとき、二部合唱ではなく、全員が心をこめて女子生徒と同じ主旋律を歌い出します。みんなゆるやかに、高く、低く、思いをこめて、大きな声で歌い続けました。コンクールが終わった後、二人の生徒が先生のところにやってきて、次のように話します。「ごめん先生、みんな、あの子と同じ旋律を歌いたかったんだよ。」先生は涙をおさえきれませんでした。

その後の女子生徒は少しずつ変化し、クラスの輪の中に入り始めます。１７年の時を超えて、女子生徒は結婚し、子どもを産んで、その家族写真を年賀状にして担任だった先生に送り続けているという話です。

道徳の授業では、このように読み物資料等を活用して、その時々の人物の心情を探ったり、最近では、「もし自分だったらどのように考えるか、どのように行動するか」等を自分ごととして捉えたりしながら、自分自身で考えを深めたり、他者と考えを共有したり、議論したりします。

このような授業を繰り返していくことは意味がある事なのかという意見も、社会の中にはあります。「生徒に感想や意見を求めても、先生が喜んだり、納得したりするような答えを出せばいいと思っているから、授業で本音はしゃべらない。だから意味がないのだ。」という意見をお持ちの方々もいます。

先日、授業を参観させていただき、この資料が範読されている時の生徒たちの表情や後ろ姿、授業での様子を見ていると、様々な思いで聞き、そして考えたり、発表したりしているのだろうなあと感じました。正義感が強いこの若い時代に、自分ではできないかもしれないけれど、うらやましいと感じたり、これはあくまで理想論だなあと思ったり、感動したり、こんなこと自分はできっこないと思ったり、葛藤したり、生きていく目標になったり、自分も少しそれに近づきたいと思ったり、自分自身のなかにある価値観と比較してみたり・・。それでいいのだと思います。人が生きていくうえで普遍的に正しいという事はあると思います。そこに近づいていくことは難しくても、考え続けていくうちに、やがて行動が変わることがあります。建前だったものが本音の行動に変化していく時があります。皆さんのなかにも、数多くそのような生徒がいます。だから学校は学校として成立し、成長します。日々の活動や道徳の授業には大きな意味があると思います。３年生の授業を参観し、生徒たちの表情を見ながら、生徒たちの成長を感じ、とても嬉しく思いました。